「五十年間の屋根瓦を受け継いで」

広島大学病院 救急集中治療医学所属　三谷 雄己

私も含め、誰もが昔は初心者であったことを医者は忘れがちだ。

初めて患者さんに採血をするとき、たくさん参考書や動画で学んで、これでもかと思うほど準備してから挑戦した。緊張や不安を乗り越えた分、無事に成功した時の喜びは今でも覚えている。

その逆も然りで、初めて喉頭鏡を握って気管挿管を試みた時、手の震えで思うようにできなかった。上級医と交代した、あのときの悔しさを忘れることはない。

こういった、新人ならではの記憶は年次を重ねるごとに少しずつ薄れていく。そんな中でも強烈に記憶に残っているのは、優しく見守りながら指導してくれた、とある先輩医師の顔。初めてうまく点滴が取れたとき、自分のことのように喜んでくれた。

「今みたいにね、返ってきたっ！と思った時こそ落ち着いて、ほんの少しだけねかせてから針を進めるんよ！」

その助言のおかげで、これまで何人の難しい点滴を取ることができたのか…感謝してもしきれない。

そんな自分もいつの間にか若手指導医と言われる立場の人間になり、ありがたいことに日々挑戦する研修医の先生たちに囲まれて働いている。

弟子がいつしか若き師となり、また新たな弟子を育てていく。屋根瓦のように、瓦同士が繋がり、支えあう教育が集中治療の現場にはある。果たして先人達が作ってくださった偉大な屋根瓦を正しく受け継ぎ、後進に引き継ぐことができるだろうか。とても自信がない。

まずはあの日の先輩のように、みんなの小さくて大きな成功を、後輩以上に喜べる指導医を目指したい。